山口大学教育学部研究論叢　第73巻　255頁～264頁　2024年1月

戦国遊説の士の弁論術としての比喩表現

南部英彦*

Figurative Expression as Rhetoric in the Youshui-zhi-Shi（游説之士）in the Warring States Period

NAMBU Hidehiko*

(Received September 29, 2023)

本稿は、陳軫の「蛇足故事」及び「管与の説」「卞荘子が虎を殺した話」という三つの故事がそれぞれ「戦国故事」においては寓話として機能していることを確認したうえで、陳軫の「管与の説」「卞荘子が虎を殺した話」と同じ「強者同士が闘い合うと、ともに疲弊して第三者の餌食になる」という筋立てをもつ寓話や比喩の使用例が説客の弁論中に複数見られることなどから、説客が用いたこれらの秀逸な比喩表現には、合従・連衡の外交戦略をめぐる弁論が盛んに行われた戦国中期の時代性の刻印が認められることを述べる。さらに、戦国中期の説客の「揣摩」の術（君主の本心を推し当てながら、君主を奮起させる弁論術）の核心は名声と実利の両面を同時に満足する計略を提案するところにあり、弁論中での比喩表現の使用は君主が計略を聞いて納得するための下地を作る意味があったことを述べる。最後に、以上の考察にもとづいて、故事成語の由来と意味を研究する際の留意点を述べる。

一　はじめに

蛇足という故事成語がある。日本語としての「蛇足」は、例えば、『広辞苑』[1]に、

［戦国策斉策］（蛇の絵を描く競争で、早く描き上げた者は足まで書きそえて負けになったという故事から）あっても益のない余計な物事。あっても無駄になるもの。じゃそく。「―ながら申し上げます」

とあるように、通常、余計な付け足しの意味で用いられる。そして同書が［戦国策斉策］と出典を明記するように、成語としての「蛇足」は『戦国策』[2]斉策二が載せる次の故事を典故とする。

楚に祠る者有り。其の舎人に卮酒を賜う。舎人相謂いて曰く、数人之を飲めば足らず、一人之を飲めば餘り有り。請う、地に画きて蛇を為し、先に成る者酒を飲まんと。一人の蛇 先に成り、酒を引きて且に之を飲まんとして、乃ち左手もて卮を持し、右手もて蛇を画きて曰く、吾 能く之が足を為せりと。未だ成らざるに、一人の蛇成り、其の卮を奪いて曰く、蛇 固より足無し。子 安んぞ能く之が足を為さんと。遂に其の酒を飲む。蛇の足を為せる者、終に其の酒を失う（楚有祠者。賜其舎人卮酒。舎人相謂曰、数人飲之不足、一人飲之有餘。請画地為蛇、先成者飲酒。一人蛇先成、引酒且飲之、乃左手持卮、右手画蛇、曰、吾能為之足。未成、一人之蛇成、奪其卮曰、蛇固無足、子安能為之足。遂飲其酒。為蛇足者、終亡其酒）。

＊山口大学教育学部、〒753－8513　山口市吉田1677－1、hidehiko@yamaguchi-u.ac.jp

楚の祭祀を司る者がその食客たちに卮に入れた酒をふるまった際、食客たちは、酒は数人で飲めば不足するが一人で飲めば十分な量だとして、地面に先に蛇の絵を描いた者が酒をすべて飲めることにした。先に蛇を描いた者は、酒を独り占めできるはずだったが、勢い余ってさらに蛇の絵に足を付け足したために、結局酒を飲めなかったことを笑う故事である。「蛇足」という成語の出典として、『戦国策』の右の故事を指摘すること自体は正しい。しかし、「蛇足」という故事成語の教材としては、「蛇足故事」を単独で取り上げるのでなく、「蛇足故事」を内に含む「戦国故事」[3]を取り上げるのが望ましい[4]。なぜなら、『戦国策』における「蛇足故事」は、陳軫なる説客[5]が楚の将軍昭陽を説得するための寓話として本来用いたものだからであり、「戦国故事」を見ることによりはじめて、説客の説得に果たす寓話の機能を考察できるからである。

陳軫に限らず、『戦国策』や『史記』[6]が載せる説客の弁論には、しばしば寓話や比喩が用いられている。説客が用いた寓話・比喩の機能や意味合いを「戦国故事」の文脈のもとで捉えるとともに、説客のそうした比喩表現の使用を弁論術の角度から捉え直すことが本稿の課題である。

本稿は、まず『戦国策』所載の説客陳軫が弁論に用いた「蛇足故事」及び「管与（かんよ）の説」「卞荘子（べんそうし）が虎を殺した話」を取り上げ、それらが「戦国故事」の中では寓話として機能していることを確認する。次に、『史記』『戦国策』を材料として、陳軫の二つの寓話と類似する筋立てをもつ寓話ないし比喩の使用例が説客の合従（がっしょう）・連衡（れんこう）の外交戦略[7]をめぐる弁論中に複数見られること、また連衡論者の張儀と合従論者の蘇秦の弁論中に合従・連衡に関わる比喩の使用例が見られることを確認する。そのうえで、『史記』所載の蘇秦・張儀の伝記および『韓非子』説難篇を手がかりに、戦国中期の説客が用いた比喩表現の役割を弁論術の角度から捉え直す。最後に、以上の考察にもとづいて、故事成語の由来と意味を研究する際の留意点について述べる。

二、寓話としての「蛇足故事」と「管与の説」「卞荘子が虎を殺した話」

まず「蛇足故事」が本来、寓話であることを、『戦国策』斉策二の「戦国故事」について確認しておこう。楚の将軍昭陽が、楚のために魏を伐ち、軍を破り将を殺して八城を奪取したのち、兵を移して斉を攻めようとした際、説客の陳軫は斉王の使者となって、昭陽に面会した。陳軫は、楚の法では、軍を破り将を殺した場合に得られる官爵は何ですかとたずねると、昭陽は、官は上柱国で、爵は上執珪ですと答え、陳軫はそれよりも貴い位は何ですかとたずねると、昭陽は令尹だけですと答えた。すると陳軫は、令尹は貴い官職ですが、楚王が二人の令尹を置くわけではありません、それでは例え話をしましょうとして「蛇足故事」を切り出したのち、今、君は楚の大臣として魏を攻め、軍を破り将を殺して八城を奪取したうえで、兵を弱めず、斉を攻めようとされていますが、斉は君を甚だ畏れておりますので、それだけで名声は十分です、さらに上の官位を加えようとしてはなりません。戦勝を続けて止むことを知らないものは、死後に今の爵位が後任の者に渡ることになります。これは蛇の足を描いたようなものですと述べると、昭陽はもっともだとして、軍を解いて引き上げた[8]。これが「蛇足故事」が置かれた「戦国故事」の文脈である。

右の説客陳軫の弁論には二つの特徴が認められる。その第一は、説得内容に適合する寓話として「蛇足故事」を機能させている点である。陳軫は、蛇の絵を描く競争中、蛇に足を添えた者が酒を飲み損なったという「蛇足故事」を、昭陽がいくら戦績を重ねても、楚が令尹を二人は置かない以上、地位の向上は望めないことを分かりやすく言い換えた比喩として機能させることにより、昭陽に説得を受け入れられやすくしているのである。特徴の第二は、説得の受け入れが、真の目的の達成に結びつくように計略を巧みに組み立てていることである。陳軫の弁論は、本来、楚の昭陽に対して斉への攻撃を止めさせるためのものであった。その目的を達成するために、昭陽に対して、地位の向上はこれ以上は望めない点に注意を向け、蛇足の比喩を用いることで、知足の実践すなわち斉へ攻撃の取りやめを促していたのである。

ところで「蛇足故事」に関わる「戦国故事」は、『史記』楚世家にも記載がある。谷口匡氏の論文「「蛇足」故事を「説」として読む」[9]は、『戦国策』と『史記』の両者の記載を比較して、それらの相違点を挙げるなかで、『戦国策』にはなく、『史記』にある記述で最も注目すべき部分として、陳軫が「蛇足」の例え話をし、その趣旨を説明したのちに「これが蛇を描いて足をつける説であります（此為蛇為足之説也）」と述べる箇所を挙げ、この蛇を描いて足をつける説（為蛇為足之説）とある場合の「説」とは、当時、臣下が君主に対して自説を主張するのに用いた弁論をいうとする。そして谷口氏は『史記』と『戦国策』の関係について、「『漢書』司馬遷伝の賛に『史記』の材料を『戦国策』から採ったかのような言及があるが、劉向が編集した古本『戦国策』を指すのであれば、その成立は『史記』より遅れるため、矛盾が生じる。よって現在では『戦国策』と『史記』が共通に基づいている戦国故事があり、傾向として、『戦

国策』は本来の故事に比較的忠実に、『史記』は脚色を加えて編集されたと考えるのが一般的」だとしたうえで、「蛇足」故事の古い形を伝えるのは『戦国策』で、『史記』では意識的に手が加えられていると見るのが自然であり、『史記』においてわざわざ「為蛇為足之説」との一文をつけ加えているところに、「遊説家としては張儀の陰に隠れた感のある彼に対する、司馬遷の積極的評価が込められているように思われる」と述べる。本稿では、『史記』の「為蛇為足之説」の「説」の理解、および『史記』と『戦国策』の関係の理解については、右の谷口氏の所説に従う。

今、谷口匡氏の論文に拠りつつ、『史記』楚世家に載る陳軫の「蛇足故事」を用いた弁論が「為蛇為足之説」と表現されていることに注意した。そこでさらに、『戦国策』秦策二の記載により、陳軫が用いた「管与の説」及び「卞荘子が虎を殺した話」が寓話として機能していることを「戦国故事」との関係から確認していく。楚が斉との交わりを絶った（楚絶斉）ので、斉が兵を挙げて楚を伐った際、説客の陳軫が楚懐王に対して領地を割譲することで、東には斉と和解し、西には秦と講和するのが最上と進言したのを受け、楚懐王は陳軫を秦に派遣した。そして陳軫は楚を救うために、秦恵文王に対して、「王は管与の説を聞かれたことはありませんか（王不聞夫管与之説乎）」として、次のように述べた。

両虎の人を諍（あらそ）いて闘う者有り。管荘子 将（まさ）に之を殺さんとす。管与 之を止（とど）めて曰く、虎は戾虫、人は甘餌なり。今 両虎 人を諍いて闘えば、小なる者は必ず死し、大なる者は必ず傷（いた）まん。子 傷虎を待ちて之を刺せば、則ち是れ一挙して両虎を兼ぬるなり。一虎を刺すの労無くして、両虎を刺すの名有りと。斉・楚 今戦う。戦えば必ず敗る。敗るれば、王 兵を起こして之を救え。斉を救うの利有りて、楚を伐つの害無し（王不聞管与之説乎。有両虎諍人而闘者。管荘子将刺之。管与止之曰、虎者戾虫、人者甘餌也。今両虎諍人而闘、小者必死、大者必傷。子待傷虎而刺之、則是一挙而兼両虎也。無刺一虎之労、而有刺両虎之名。斉楚今戦、戦必敗。敗、王起兵救之、有救斉之利、而無伐楚之害）。

陳軫が用いた「管与の説」とは、虎は貪欲な動物で、人はうまい餌であるから、両虎が人を食い殺そうとして闘い合えば、小虎は死に、大虎も傷つくので、これらをどちらも刺し殺そうとするよりは、いったん静観して小虎が死に、大虎が傷むのを待って、傷んだ大虎を刺し殺した方がよく、そうすれば一挙両得の功名が得られると管与が管荘子に勧めたという話である。この「管与の説」は、小虎は斉を、大虎は楚を、人は領土を、管荘子は秦を、管与は陳軫をそれぞれ喩える。陳軫はこの「管与の説」を用いることで、斉・楚を敢えて戦わせ、斉が敗れるのを待って斉を救えば、斉を救ったとの名声を得ると同時に楚を伐つことに伴う損害がないという一挙両得の計略を秦王に分かりやすく進言した。陳軫は、斉との交わりを絶つことで斉から討伐の兵を挙げられた楚が秦に背後から攻撃されるのを防ぐために、秦恵文王が「管与の説」による一挙両得の計略を採用するよう説得を行ったのである。

陳軫の「管与の説」は、これに対応する『史記』張儀列伝が載せる陳軫の伝記では「卞荘子が虎を殺した話」となっている。張儀列伝では、韓魏が攻め合って、一年経っても和解しないという状況を救済するか否か、判断に迷っていた秦恵文王に対して、秦を訪れた陳軫は、「あの卞荘子が虎を殺した話を王にお聞かせした者はありましょうか（亦嘗有以夫卞荘子刺虎聞於王者乎）」として、次のように述べている。

荘子 虎を刺さんと欲す。館豎子（かんじゅし） 之を止（とど）めて曰く、両虎方且（まさ）に牛を食らわんとす。甘きを食らえば必ず争い、争えば則ち必ず闘う。闘えば則ち大なる者傷み、小なる者死す。傷むに従りて之を刺せば、則ち一挙して必ず双虎の名有りと。卞荘子以て然りと為し、立ちて之を須つ。頃く有りて、両虎果たして闘い、大なる者傷み、小なる者亡ぶ。傷むに従りて之を伐てば、一挙して果たして双虎の功有り。今 韓・魏相攻めて、期年にして解かず。是れ必ず大国傷み、小国亡ぶ。傷むに従りて之を伐てば、一挙して必ず両実有り。此れ猶（なお）荘子虎を刺すがごときの類なり（荘子欲刺虎、館豎子止之、曰、両虎方且食牛。食甘必争、争則必闘、闘則大者傷、小者死。従傷而刺之、一挙必有双虎之名。卞荘子以為然、立須之。有頃、両虎果闘、大者傷、小国死。荘子従傷者而刺之、一挙果有双虎之功。今韓魏相攻、期年不解、是必大国傷、小国亡、従傷而伐之、一挙必有両実。此猶荘子刺虎之類也）。

卞荘子が虎を殺そうとした際、館豎子はこれを制止して、両虎が牛を食らわんとして闘争すれば、大虎が傷み、小虎が死ぬので、この時、傷んだ大虎を殺せば、一挙両得になると諭した。陳軫はこの「卞荘子が虎を殺した話」を引いたうえで、大国（魏）と小国（韓）を戦わせ、大国が傷み小国が滅んだ段階で討伐の兵を挙げるならば、一挙にして韓・魏を滅ぼすという功名が得られると弁論した。つまり「卞荘子が虎を殺した話」に対応する「戦国故事」は、「管与の説」のそれとは異なっているが、この二つの話は、いずれも両虎の闘争をモチーフとして「両虎が闘い合うと、ともに疲弊して、これらを独り占めでき

るので、敢えて両虎を闘わせた方がよい」という一挙両得の方法を示唆する寓話であり、陳軫はこの寓話により、両国（斉・楚または韓・魏）を敢えて闘わせてともに疲弊するのを待つのがよいとの趣旨の弁論を行ったことを確認できる。

三、合従・連衡の外交戦略をめぐる弁論に用いられた比喩表現

本節では、『史記』『戦国策』を材料として、陳軫の「管与の説」「卞荘子が虎を殺した話」と類似する筋立てをもつ寓話・比喩が合従・連衡の外交戦略をめぐる説客の弁論中に複数例見られること、また連衡論者の張儀と合従論者の蘇秦の弁論中に合従・連衡に関わる比喩の使用例が見られることを確認する。

『史記』張儀列伝に「陳軫は游説の士なり。張儀と倶に秦恵文王に事え、皆貴重せられて寵を争う。…秦に居ること期年、秦恵王終に張儀を相としたれば、陳軫楚に奔る（陳軫者游説之士。与張儀俱事秦恵王、皆貴重争寵。…居秦期年、秦恵王終相張儀、而陳軫奔楚）」とあるのによると、陳軫は、当初、遊説の士として秦恵文王の寵愛を張儀と争ったことがあり、秦恵王が張儀を宰相に任じたため、陳軫は楚に出奔したという。『史記』六国年表によると、秦恵文王が張儀を初めて宰相に任じたのは恵文王元年（前三二八）で、恵文王初更二年（前三二二）に張儀は秦の宰相の任を解かれ、魏の宰相となっている。前節で見た『戦国策』斉策二では、陳軫は斉の使者として楚の昭陽に弁論を行う者であったが、谷口氏が指摘するとおり、『史記』楚世家の「戦国故事」には、楚懐王六年（前三二三）という紀年が付され、また「陳軫適為秦使斉」という記述がある。この『史記』の記述によると、陳軫は、秦の使者でありながら、斉のために楚の将軍昭陽に献策した者であったことになる。陳軫は、諸侯の利害・対立の構図を把握して、変動する国際状況への対応策を随時講じることができた人物であった。

一方、『史記』楚世家によると、楚懐王の十一年（前三一八）に、蘇秦が統括者となって山東の六国（斉・燕・楚・韓・魏・趙）の合従の盟約を取り結んだ際、楚懐王は合従の長となった。同じく、楚世家及び張儀列伝によると、楚懐王の十六年（前三一三）、秦は斉を伐とうとしたが、楚と斉とが合従の盟約を結んだのを憂慮した秦恵文王は、宰相の張儀を解任して、楚に派遣し、もし楚が斉との合従の同盟を絶つならば、秦は楚に商（しょう）・於（お）の地六百里四方を献じると言わせた。その際、陳軫は、秦が楚を重んじるのは、斉と結んでいるためであり、もし関を閉ざして斉との盟約を絶てば楚は孤立するので、秦は商・於の地六百里四方は与えるはずがないとして諫めたが、懐王はこれを聴かず、張儀を宰相に任じて、懐王に合従の盟約を破棄させたのである。第一節で見た『戦国策』秦策二の陳軫の逸話の冒頭に「楚絶斉」とあったのは、楚が斉との合従の盟約を絶ったことを示す。その際、陳軫は、楚の客卿の立場から、楚にとっては斉・秦と和解するのが上策として、秦王に「管与の説」による一挙両得の計略を献じたのであった。

さて『史記』張儀列伝によると、張儀は、右のように六国の従約を解いて秦と盟約を結ばせる連衡策を推し進めた人物である。先述の張儀が楚王に対して行った商・於の地六百里四方を献じるという献策は実行に移されず、張儀は、臣が献じると言ったのは六里四方だと詭弁を弄したので、楚懐王の怒りを買い、楚は秦を攻撃したものの、楚はかえって秦と斉の連合軍の攻撃に遭い、秦により丹陽・漢中の地を切り取られ、のち楚は秦を再度、藍田において攻撃したが大敗したので、秦に両城を与えることで和平した。秦はさらに黔中（けんちゅう）の地を商・於の地と交換することを要求すると、領地の交換ではなく黔中の地と張儀一人とを交換し、怨みを晴らしたい[10]としたので、張儀は楚におもむくと、楚の臣下の靳尚と楚王の夫人の鄭袖を巧みに利用することで、赦免された。その後、蘇秦の死[11]を聞いた張儀は、楚懐王に向けて秦と結ぶ連衡策[12]を献策する。張儀は、秦は天下の半分を領有し、兵力は四方の敵に当たれるほど強く、かつ険阻な山脈に包まれ黄河を帯び、四方が塞がった要害の地であり、また虎賁の勇士百万あまり、兵車千台、騎馬一万匹、山のごとき食糧の備蓄をもち、さらに法令によって士卒が厳しく統率されていることなどを挙げたうえで「そのうえ合従論者は群羊を駆り立てて猛虎を攻めるのと違いはなく、虎と羊とでは相手にならぬことは明らかです。今、王は猛虎に与せず群羊を仲間にされますのは、恐れながら大王の過ちかと思われます（且夫為従者、無以異於駆群羊而攻猛虎。虎之与羊不格明矣。今王不与猛虎而与群羊、臣窃以為大王之計過也）」と述べた。張儀は、六国を群羊に、秦を猛虎になぞらえ、六国が合従の盟約を結び束になって秦を攻撃したところで、秦の圧倒的な国力には到底匹敵できないと諭したのである。そのうえで張儀は「およそ天下の強国は、秦でなければ楚、楚でなければ秦であって、両国が争い合っても、勢いとして両立しません。…そもそも秦が十五年間、函谷関を出て斉・趙を攻めることをしませんのは、天下を併呑しようとの心をひそかにもつからです。楚はかつて秦との間に揉め事が起こって、漢中に戦って楚は敗れ、珪を執る列侯七十人あまりが、漢中に死にま

した。楚王は大いに怒り、兵を挙げて藍田に闘いました。これは世に言う両虎相搏つということであります。いったい秦・楚がともに疲弊すれば韓・魏に背後から制圧されることになりますので、計略としてこれ以上危ういものはありません（凡天下強国、非秦而楚、非楚而秦、両国交争、其勢不両立。…且夫秦之所以不出兵函谷十五年以攻斉趙者、陰謀有合天下之心。楚嘗与秦構難、戦於漢中、楚人不勝、列侯執珪死者七十餘人、遂亡漢中。楚王大怒、興兵襲秦、戦於藍田。此所謂両虎相搏也。夫秦楚相敝而韓魏以全制其後、計無危於此者矣）」と述べた。秦は六国による合従の盟約が結ばれた十五年間、斉と趙を攻撃しないのは、天下を併呑する機会を待っているからである一方、楚がかつて秦と漢中で戦って敗れて漢中を失い、楚が怒って兵を秦の藍田に差し向けたのは、あたかも両虎が戦い合うようなものであって、そうなると秦・楚が疲弊した機会を韓・魏が窺うことになると諭したのである。楚懐王は張儀の献策を容れ、秦との和親を許可した。

ここで張儀が楚が秦と死闘を繰り返す事実を「此れ所謂る両虎相搏つなり（此所謂両虎相搏也）」とまとめていることに注目したい。「所謂」を冠して「両虎相搏」というところからすると、「両虎相搏」という四文字は当時の成語として引用されたもので、「両虎」は秦楚を喩えている。張儀は同じ弁論中に「為従者無以異於駆群羊而攻猛虎」と「此所謂両虎相搏也」という二つの比喩を用いながら、楚懐王に対して、合従の盟約を結んだ場合と楚単独の場合のいずれにせよ秦と戦うことは無謀だと伝えたのである。

さて、張儀が用いた「両虎相搏」という成語は、そのあとに「秦楚相敝而韓魏以全制其後」とつなげているところから、「両虎が闘い合うと、両者ともに疲弊する」という教訓を本来含んでいる[13]と捉えることができる。すると、この成語には「強者同士が闘い合うのは、ともに疲弊するのでやめた方がよい」という意味合いが込められていることになる。陳軫の「管与の説」と「卞荘子が虎を殺した話」は、いずれも「両虎」の闘争をモチーフにして、「強者同士が闘い合うと、両者疲弊してともに第三者の餌食になる」という筋立てをもつ点で、張儀が引いた「両虎相搏」という成語と共通する。しかし陳軫が引いた二つの寓話は、右の筋立てに加えて「強者同士を敢えて闘わせ、それらが疲弊したのちこれを独り占めせよ」という一挙両得の方法を示唆する点で、張儀が引いた「両虎相搏」という成語が含む意味合いとは異なっている。

そこで以下、合従・連衡の外交戦略をめぐる戦国中期[14]の趨勢に関わって、「強者同士が闘い合うと、両者疲弊してともに第三者の餌食になる」という筋立てをもつ寓話が説客によって用いられた「戦国故事」を三例[15]挙げ、それぞれについてその筋立てにどのような意味合いが託されているかを見ていきたい。

第一の例は、『史記』春申君伝が記載する、戦国四君の一人である楚の黄歇（春申君）の上書である。黄歇は、楚の懐王が秦の誘いに乗って秦の朝廷に参内して欺かれ、秦に抑留されて死んだこと、懐王の子の頃襄王を秦が侮っていることを知り、秦が兵を挙げれば楚は滅ぼされると考え、秦昭王に向けて上書した。

天下 秦・楚より強きは莫し。今聞く、大王 楚を伐たんと欲すと。此れ猶 両虎の相与に闘うがごときなり。両虎 相与に闘えば、駑犬 其の獘を受く。楚に善くするに如かず（天下莫強於秦楚。今聞大王欲伐楚、此猶両虎相与闘。両虎相与闘而駑犬受其獘。不如善楚）。

黄歇は、天下で秦・楚以上の強国はないとしたうえで、今 秦が楚を伐つのは、両虎が闘い合うようなもので、両虎が疲れると駄犬がその疲れに付け込むことになるから、秦は楚とよしみを結んでおいた方がよいとする。その理由として、楚を攻撃して弱めることは、すなわち韓・魏を強め、ひいては斉を強めることであり、韓・魏・斉・趙の四国が秦を攻撃することにつながることを挙げて、秦は楚と好誼を結ぶことを献策すると、これを秦昭王は採用して、秦は楚と同盟の約を結んだ。

第二の例は、『戦国策』斉策三が載せる次の記事である。

斉 魏を伐たんと欲す。淳于髡 斉王に謂いて曰く、韓子盧は天下の疾犬なり。東郭逡は、海内の狡兎なり。韓子盧 東郭逡を逐い、山を環ること三たび、山を騰ること五たび。兎は前に極まり、犬は後に廃る。犬兎俱に罷れて、各其の処に死す。田夫 之を見て、労勧の苦無くして其の功を擅にす。今 斉・魏久しく相持して其の兵を頓れしめ、其の衆を弊れしむれば、臣 強秦・大楚の其の後を承けて、田夫の功有るを恐ると。斉王懼れ、謝して将に士を休わしめんとす（斉欲伐魏。淳于髡謂斉王曰「韓子盧者、天下之疾犬也。東郭逡者、海内之狡兎也。韓子盧逐東郭逡、環山者三、騰山者五。兎極於前、犬廃於後。犬兎俱罷、各死其処。田夫見之、無労勧之苦、而擅其功。今斉魏久相持、以頓其兵、弊其衆、臣恐強秦大楚承其後、有田夫之功。斉王懼、謝将休士也）。

淳于髡は斉宣王に対して、韓子盧という足の速い犬が東郭逡というすばしこい兎を追いかけ続けたのち、犬・兎ともに倒れ、田夫に捕らえられたという寓話を用いて、それと同様に、斉・魏が闘い合ってともに疲弊すると、強秦・大

楚の餌食になるとした。斉宣王はこれを聞いて懼れ、将軍を解任し、兵士を帰休させた。

第三の例は、『戦国策』燕策二が記せる次の記事である。

趙 且に燕を伐たんとす。蘇代 燕王の為に恵王に謂いて曰く、今者 臣来たりて易水を過ぎるに、蚌方に出でて曝す。而して鷸 其の肉を啄むに、蚌合せて其の喙を拑む。鷸曰く、今日雨ふらず、明日雨ふらざれば、即ち死蚌有らんと。蚌亦た鷸に謂いて曰く、今日出でず、明日出でざれば、即ち死鷸有らんと。両者肯えて舎てず、漁者得て并せて之を禽う。今趙且に燕を伐たんとして、燕・趙久しく相支えて、以て大衆を弊れしむれば、臣強秦の漁父と為らんことを恐る。故に願わくは王の之を熟計せんことをと。恵王曰く、善しと。乃ち止む（趙且伐燕。蘇代為燕王謂恵王曰、今者臣来、過易水、蚌方出曝、而鷸啄其肉、蚌合而拑其喙。鷸曰、今日不雨、明日不雨、即有死蚌。蚌亦謂鷸曰、今日不出、明日不出、即有死鷸。両者不肯相舎、漁者得而并禽之。今趙且伐燕、燕趙久相支、以弊大衆、臣恐強秦之為漁父也。故願王之熟計之也。恵王曰善。乃止）。

蘇代は趙恵文王に対して、鷸蚌が争って両者疲弊し、結局、両者とも漁父に生け捕りにされたという寓話を用い、それと同様に、燕・趙が闘い合ってともに疲弊すると秦に併合されると説くと、趙恵文王はこれを認め、出兵をやめた。

以上三例の「戦国故事」のうち、第一例の黄歇の秦昭王への上書は、連衡論者であった張儀の没後[16]の秦楚の状況をふまえてなされたものであり、第二例の淳于髡が献策した斉宣王は蘇秦が合従の盟約を取り付けた相手であり、第三例の蘇代は、蘇秦の弟で、蘇秦の死後、蘇秦の故事を引き継ごうとした人物であることから[17]、三例ともに、戦国中期の合従・連衡の外交戦略に関わる「戦国故事」と捉えておいて大過ないと思われる。黄歇が用いた「両虎相与闘而駑犬受其獘」という比喩、淳于髡の「田夫の功」の寓話、蘇代の「漁父の利」の寓話はすべて、「両者が闘い合うと、ともに疲弊して第三者の餌食になる」という筋立てにより、「強者同士が闘い合うのは、ともに疲弊するのでやめた方がよい」との意味合いの主張がなされている点で、張儀が引いた「両虎相搏」という成語がもつ意味合いと共通する。

一方、『史記』蘇秦列伝に見える、蘇秦の献策中にも、合従・連衡の外交戦略と関わる比喩が用いられている。『史記』蘇秦列伝所載の蘇秦が六国の合従の盟約を取り結ぶため楚威王に遊説した際の弁論中に「秦は虎狼の国にして、天下を呑むの心有り。秦は、天下の仇讎なり。衡人皆諸侯の地を割きて以て秦に事うるは、此れ所謂る仇を養いて讎に奉ずる者なり（秦、虎狼之国也、有呑天下之心。秦、天下之仇讎也。衡人皆欲割諸侯之地以事秦、此所謂養仇而奉讎者也）」とあって、蘇秦は秦は天下を併呑せんとの欲をもつ虎狼のような国であるから、天下の仇讎であるにもかかわらず、連衡論者が自国の領地を割いて秦に従事させるのは、仇讎を養い奉ずるようなものだと、連衡策の愚かしさを指摘する。また蘇秦が韓宣王に遊説した際の言葉に次のようにある。

大王 秦に事うれば、秦は必ず宜陽・成皐[18]を求めん。今 茲に之を効せば、明年又復た地を割くを求めん。与うれば則ち地以て之に給する無く、与えざれば則ち前功を弃てて後禍を受く。且つ大王の地 尽くる有りて、秦の求むること已むこと無し。此れ所謂怨を市りて禍を結ぶ者にして、戦わずして地已に削らる。臣聞く、鄙諺に曰く、寧ろ鶏口と為るとも、牛後と為る無かれと。今 大王 西して臂を交わらせて、秦に臣事するは、何ぞ牛後に異ならんや。夫れ大王の賢を以て、強韓の兵を挾み、而して牛後の名有るは、臣窃かに大王の為に之を羞ず（大王事秦、秦必求宜陽、成皐。今茲効之、明年又復求割地。与則無地以給之、不与則弃前功而受後禍。且大王之地有尽而秦之求無已、以有尽之地而逆無已之求。此所謂市怨結禍者也、不戦而地已削矣。臣聞鄙諺曰、寧為鶏口、無為牛後。今大王西而交臂而臣事秦、何異於牛後乎。夫以大王之賢、挾強韓之兵、而有牛後之名、臣窃為大王羞之）。

蘇秦は韓宣王に対して秦に仕えた場合は、宜陽・成皐をはじめとする領地の割譲を要求され続けることになり、これは世に言う「怨を市りて禍を結ぶ」ことだ諫めつつ、「寧為鶏口、無為牛後」という鄙諺[19]を挙げ、韓王の賢聖と兵力がありながら、秦に臣事するのは「牛後」に他ならないと諭している。蘇秦は「寧為鶏口、無為牛後」という鄙諺によって、合従策に加担して弱小な国の長である方が、連衡策に加担して秦の属国となるよりもましではないかと示唆するのである。この鄙諺が動物の比喩を用いた簡潔な成句であることが、鄙語が示す教訓に説得力を与えていると言えよう。張儀の用いた「為従者無以異於駆群羊而攻猛虎」との比喩及び「両虎相搏」という成語と、蘇秦の用いた「秦、虎狼之国也、有呑天下之心」との比喩及び「寧為鶏口、無為牛後」という鄙諺とはそれぞれ、合従策を否定する立場と肯定する立場のそれぞれを反映する。そして陳軫の「管与の説」と「卞荘子が虎を殺した話」という二つの寓話、黄歇の「両虎相与闘而駑犬受其獘」という比喩、淳于髡の「田夫の功」の寓話、蘇代の「漁父の利」の寓話が「強者同士が闘い合うと、ともに疲弊して第三者

の餌食になる」という筋立てをもつ点で共通していた。説客が用いたこれらの秀逸な比喩表現には、合従・連衡の外交戦略をめぐる弁論が盛んに行われた戦国中期の時代性の刻印が認められるのである。

四、戦国中期の説客の弁論術としての比喩表現

第二節・第三節では陳軫その他の説客が用いた寓話・比喩が合従・連衡の外交戦略に果たした機能を中心に検討を加えた。本節では視点を変え、『史記』の蘇秦・張儀の伝記と『韓非子』説難篇を手がかりに、戦国中期の説客が用いた比喩表現の役割を弁論術の角度から捉え直してみたい。

蘇秦は東周雒陽の人なり。東のかた斉に事師して、之を鬼谷先生に習う。出游すること数歳、大いに困しみて帰る。…是に於いて周書陰符を得て、伏して之を読む。期年にして、以て揣摩を出して曰く、此れ以て当世の君に説くべしと。周顕王に説くを求む。…乃ち西のかた秦に至る（蘇秦者東周雒陽人也。東事師於斉、而習之於鬼谷先生。出游数歳、大困而帰。…於是得周書陰符、伏而読之。期年、以出揣摩、曰、此可以説当世之君矣。求説周顕王。…乃西至秦）。

張儀は魏人なり。始め嘗て蘇秦と倶に鬼谷先生に事え、術を学び、蘇秦自ら張儀に及ばずと以う（張儀者、魏人也。始嘗与蘇秦倶事鬼谷先生、学術、蘇秦自以不及張儀）。

蘇秦は「周書陰符[20]」なる書物を読んで、「揣摩」の術を案出したという。ここにいう「揣摩」とは何か。司馬貞『史記索隠[21]』引く江邃の説に「人主の情を揣り、摩して之に近づく（揣人主之情、摩而近之）」とあり、滝川亀太郎『史記会注考証[22]』引く中井積徳の説に「摩とは、揣度の後に在りて、手を以て之を摩り弄ぶが如きなり。既に能く彼の人の情懐に暁通し、我の言を以て之を動揺上下して、以て吾が嚢中に導き入るるなり。或いは之を揚げ、或いは之を抑えて、皆激発する所有るは、即ち所謂る摩なり（摩、在揣度之後、如以手摩弄之也。既能暁通彼人之情懐、而以我之言動揺上下之、以導入于吾嚢中也。或揚之、或抑之、皆有激発即所謂摩也）」とあるのを参考にすると、「揣摩」とは、「君主の心中を推し当てながら、君主を奮起させること」と捉えられる。蘇秦と張儀はともに鬼谷先生に従事しているから、張儀が学んだ「術」もまた「揣摩」の術を指すだろう[23]。「揣摩」の弁論術は、蘇秦・張儀ばかりでなく、あらゆる説客の弁論の実践に欠かせないものだったと思われる。蘇秦が学んだ「周書陰符」と「揣摩」の術との関係についてはよく分からないが[24]、戦国の説客が実践した「揣摩」の術（方法）とはどういうものか及び「揣摩」の術における比喩表現の役割を考察できる資料がある。『韓非子』説難篇[25]の次の文章である。

およそ君主を説得することの難しさは、説得内容をととのえる難しさでもなく、また意見を分別して明らかにする難しさでもなく、また自由自在に述べ尽くす難しさでもなく、説得する君主の本心に自分の説得内容を適合させることにある。（1）説得する相手が名声を高めようとしている場合に大きな利益を得る話をすると、志操が低く、卑賤な扱いを受けたと思われ、必ず疎んじられる。（2）説得する相手が大きな利益を得ようとしている場合に、名声を高める話をすると、気が利かず事情にうといと思われ、必ず採用されない。（3）説得する相手がひそかに大きな利益を得ようとしているが、上辺には名声を高めようとしている場合に、名声を高める話をすると、上辺ではこちらの身を受け入れながら、実際には遠ざけられ、大きな利益を得る話をすると、ひそかにその意見を用いながら、上辺ではこちらの身を棄てられる。このことはよく考えておかねばならない[26]。

韓非は君主を説得する難しさとは、説得する君主の本心に自身の説得を適合させることにあるとしたうえで、「説得する相手が名声を高めようとしている場合」、「説得する相手が大きな利益を得ようとしている場合」、「説得する相手が本心では大きな利益を得ようとしているが、上辺には名声を高めようとしている場合」の三通りに分け、君主の本心―君主が名声と実利それぞれの獲得に関心を寄せる度合い―にかなう説得を行うことの困難さを力説する。一方、説難篇に「およそ君主を説得する際の務めは、説得する相手が誇りとしていることを飾り立て、恥としていることを隠すところにあるとし、また相手が自分の智能を誇りにしている場合は、別の類似した事を挙げて、君主が説得に納得するための下地を多く作り、こちらの説を採らせながら、知らぬふりをして相手の知識を助ける（凡説之務、在知飾所説之所矜而滅其所恥。…有欲矜以智能、則為之挙異事之同類者、多為之地、使之資説於我、而佯不知也以資其智）」とある。右の『韓非子』説難篇の所説[27]を参考にすると、説客の弁論術としての「揣摩」の術の核心は、名声と実利の両面を同時に満足する計略を提案するところにあり、弁論中での比喩表現の使用は君主が計略を聞いて納得するための下地を作る意味があったと推測できる[28]。

本稿第一節では、陳軫が「管与の説」を用いて、斉と楚を敢えて戦わせ、両国が疲弊するのを待ったうえで斉を救えば、斉を救ったとの名声を得ると同時

に楚を伐つことに伴う損失がないという一挙両得の計略を秦恵王に進言した例、及び同じく陳軫が「卞荘子が虎を殺した話」を引いて、大国（魏）と小国（韓）を戦わせ、大国が傷み小国が滅んだ段階で討伐の兵を挙げるならば一挙にして韓・魏を滅ぼしたとの功名が得られると弁論した例を見た。第三節では、蘇秦が、韓宣王に対して、秦に仕えた場合は、領地の割譲を要求され続けるという実害を述べたうえで「寧為鶏口、無為牛後」という鄙諺によって「以大王之賢、挾強韓之兵、而有牛後之名、臣窃為大王羞之」と述べ、秦に仕えるのは、名声の面でも損失を被ることを述べた例を見た。これらの例から、説客が計略を提示したり、主張を行ったりする際に、引用した寓話の趣旨や鄙諺の主題と関連させながら、名声と実利の両面にわたる利害得失を提示していることが知られるのである。

ところで、蘇秦・張儀をはじめとする説客たちの合従・連衡をめぐる外交戦略の主眼は、複数の諸侯の利害・対立関係の構図を描きながら、説客として関与する国家の存続を図ることであった。こうした説客の策謀の在り方は、『孫子』の謀攻篇[29]に「百戦百勝は、善の善なる者に非ざるなり。戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり。故に上兵は謀を伐ち、其の次は交を伐ち、其の次は兵を伐ち、其の下は城を攻む（百戦百勝、非善之善者也、不戦而屈人之兵、善之善者也。故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城）」と見えるような、敵の謀略や外交政策を打ち破ることで敵と戦わずに敵を屈服させることを、敵の軍隊や城市を実際に攻めるよりも上策とする兵法と類似するものといえる。前漢の成帝の時代に、戦国遊説の士の策謀の書として『戦国策』を編修した劉向はその「戦国策書録[30]」で、周の文明が衰微し、道徳・仁義を棄てて詐謀が行われる戦国の時代になると、「游説権謀之徒」が世に尊ばれ、蘇秦の合従策と張儀の連横策が天下に行われたとしたうえで、次のように述べる。

戦国の時、君徳 浅薄なれば、之が謀策を為す者、勢に因りて資と為し、時に拠りて為さざるを得ず。故に其の謀は、急を扶け傾を持するに、一切の権を為す。以って国に臨んで教化すべからずと雖も、兵革も急を救うの勢なり。皆高才秀士 時君の能く行う所を度（はか）り、奇策異智を出し、危を転じて安と為し、亡を運らせて存と為せば、亦た喜ぶべし。皆 観るべし（戦国之時、君徳浅薄、為之謀策者、不得不因勢而為資、拠時而為。故其謀、扶急持傾、為一切之権、雖不可以臨国教化、兵革救急之勢也。皆高才秀士、度時君之所能行、出奇策異智、転危為安、運亡為存、亦可喜。皆可観）。

劉向はいう。戦国時代は、君主の徳が浅薄だったため、策謀を立てる者は、時代の趨勢を拠り所とせざるをえなかった。だからその策謀は、国家の危急を救うための臨機応変の策であって、民の教化に資するものではなかったが、高才秀士が、時の君主のなしうることを推し量って、すぐれた策謀を示し、危急を安寧へと導いて、亡びゆく国を存続へと向かわせたところに観るべき所があると。戦国遊説の士が用いた寓話・比喩は、右の劉向の「書録」にいう高才秀士の「奇策異智」としての弁論術の一部を成すものだったと捉えられる。

五、おわりに

本稿は、まず陳軫の「蛇足故事」及び「管与の説」「卞荘子が虎を殺した話」という三つの故事がそれぞれ「戦国故事」においては寓話として機能していることを確認したうえで、陳軫の「管与の説」「卞荘子が虎を殺した話」と同じ「強者同士が闘い合うと、ともに疲弊して第三者の餌食になる」という筋立てをもつ寓話ないし比喩の使用例が説客の弁論中に複数見られること、また連衡論者の張儀と合従論者の蘇秦の弁論の中に合従・連衡に関わる比喩の使用例が見られることから、説客が用いたこれらの秀逸な比喩表現には合従・連衡の外交戦略をめぐる弁論が盛んに行われた戦国中期の時代性の刻印が認められることを述べた。さらに、戦国中期の説客の「揣摩」の術（君主の本心を推し当てながら、君主を奮起させる弁論術）の核心は名声と実利の両面を同時に満足する計略を提案するところにあり、弁論中での比喩表現の使用は君主が計略を聞いて納得するための下地を作る意味があったことを述べた。

さて「はじめに」で「蛇足」という故事成語の教材としては、「蛇足故事」を内に含む「戦国故事」を取り上げるのが望ましいことを述べた。これは、『戦国策』『史記』を典故とする「蛇足」以外の故事成語を研究する際にも言えることである。本稿で取り上げた陳軫の「管与の説」からは、「両虎人を諍うて闘う」という成語が生まれ、また黄歇、淳于髡、蘇代の弁論からはそれぞれ「両虎 相与に闘いて、駑犬 其の弊を受く」、「犬兎の争い・田夫の功」、「鷸蚌の争い・漁父の利」という成語が生まれた。近藤光男氏はその著『戦国策[31]』の中で、「八五 漁者 得て之を并せ禽う」という見出しで、「鷸蚌の争い・漁父の利」という成語の典故である『戦国策』燕策二の「戦国故事」を現代語訳・書き下し文・漢文を併せて掲載したのち、次のような文章を寄せている。

成語「漁父の利」「鷸蚌の争い」の出処である。『史記』「春申君列伝」に見える「両虎相闘うて駑犬其の弊を受く」は、ほぼこれと同意と言ってよ

いであろう。しかし『戦国策』（五四　秦上）に見える「両虎 人を争うて闘う」の場合は、必ずしも同意とは言えない。積極的に闘わせて両者の疲弊を待とうという意が込められている。似たような成語でも、原典では少しずつニュアンスが異なっている点に注意すべきであろう。

右の文章で近藤氏は、互いによく似た意味をもつ成語同士でも、原典を見ると、それぞれの成語の出処である寓話・比喩が説客の弁論に用いられた際の意味合いに違いがあるものがあることに注意を促している。筆者は、右の近藤氏の見解を妥当と判断する。すでに本稿で述べた通り、陳軫が用いた「管与の説」と「卞荘子が虎を殺した話」という二つの寓話は「強者同士を敢えて闘わせて、ともに疲弊するのを待つのがよい」という意味合いを本来もつが、その一方で張儀が用いた「両虎相搏」という成語、黄歇が用いた「両虎相与闘而駑犬受其弊」という比喩、淳于髡が用いた「田夫の功」の寓話、蘇代が用いた「漁父の利」の寓話は「強者同士が闘い合うのは、ともに疲弊するのでやめた方がよい」という意味合いで用いられていたからである。故事成語の由来と意味を研究する際には、原典における故事（寓話・比喩を含む）の意味と用法を併せて正しく把握することが必須の作業となると言えよう。

注

（1）『広辞苑 第五版』（岩波書店、一九九八）

（2）『戦国策』の引用は、所謂る姚本を底本とする『戦国策』（上海古籍出版社、一九七八）による。

（3）蛇足の故事とそれが説客によって弁論に用いられた戦国時代の故事とを対比するため、それぞれに括弧を付して「蛇足故事」「戦国故事」と表記する。

（4）高等学校の教科書で、「故事・寓話」という項目のもと「蛇足」という見出しを立てて、「蛇足故事」を含む「戦国故事」を取り上げるものがかつてあった（『高等学校 改訂版 国語総合』（第一学習社、二〇〇八）。これは、妥当な措置だったと思われる。

（5）「説客」という語は、『新字源』（角川書店、一九六八）により、「諸国をめぐって自分の意見を君主に説きすすめる者」の意で用いる。なお、本稿のタイトル及び本稿第四節では「説客」について「戦国遊説の士」という呼称を用いている。これは、戦国時代の「戦国」と、『史記』張儀列伝に「陳軫者游説之士」などと見える「游説之士」という表現とを合わせたものである。

（6）『史記』の引用は『史記』（中華書局出版、一九五九）による。

（7）合従は、蘇秦が主唱した策で、斉・燕・楚・韓・魏・趙の六国が南北に同盟して一強の秦に対抗すること。連衡は、張儀が主唱した策で、六国が連合して西方の秦と同盟を結ぶこと。合従の「従」は「たて」、連衡の「衡」は「よこ」の意。

（8）この箇所は『戦国策』斉策二の以下の文による。「昭陽為楚伐魏、覆軍殺将得八城、移兵而攻斉。陳軫為斉王使、見昭陽、再拜賀戦勝、起而問、楚之法、覆軍殺将、其官爵何也。昭陽曰、官為上柱国、爵為上執珪。陳軫曰異貴於此者何也。曰、唯令尹耳。陳軫曰、令尹貴矣。王非置両令尹也。臣窃為公譬可也。蛇足故事 今君相楚而攻魏、破軍殺将得八城、不弱兵、欲攻斉。斉畏公甚、公以是為名居足矣、官之上非可重也。戦無不勝而不知止者、身且死、爵且後帰、猶為蛇足也。昭陽以為然、解軍而去」。

（9）谷口匡「「蛇足」故事を「説」として読む」（『京都教育大学国文学会誌』四〇、二〇一三）

（10）『史記』屈原伝に「楚王曰、不願得地、願得張儀而甘心焉」とのあるのを勘案した。

（11）蘇秦の没年は、『史記』張儀列伝の「聞蘇秦死」の箇所に対する『索隠』に「按此時秦恵王之後年十四年」とあるのによると、前三一一年のこと。

（12）以下に記述した張儀の献策と重なる文が『戦国策』楚策一にある。

（13）趙恵文王（前二九八～前二六六 在位）に仕えた、「完璧」の故事で有名な藺相如が「今 両虎共闘、其勢不倶生」（『史記』廉頗・藺相如列伝）として、廉頗と己を「両虎」に喩え、両虎が闘い合えば必ずどちらかは死ぬとするのも、張儀の引く成語「両虎相搏」の理解に際して参考になる。

（14）本稿では、戦国時代の範囲を前四〇三～前二二一と定め、これを便宜上、前期（前四〇三～前三四三）・中期（前三四二～前二八二）・後期（前二八一～前二二一）までの三期と分けたうちの中期を戦国中期と呼ぶ。

（15）第一の例として挙げた『史記』春申君列伝の文は、『戦国策』秦策四では「天下莫強於秦楚。今聞大王欲伐楚、此猶両虎相闘而駑犬受其弊、不如善楚」という文に作っている。第二、第三の例として挙げた『戦国策』斉策二及び燕策二に相当する「戦国故事」は『史記』にはない。

（16）張儀の没年は、『史記』張儀列伝に「（秦武王）二年、…張儀死於魏」とあるのによると、前三〇九年のこと。

（17）『史記』蘇秦列伝に「蘇秦之弟曰代、代弟蘇厲、見兄遂、亦皆学。及蘇秦死、代乃求見燕王、欲襲故事」とある。

（18）宜陽・成皋は韓の都市。

（19）『戦国策』韓策二では「臣聞鄙語曰、寧為鶏口。無為牛後」とある。「鄙諺」「鄙語」は、前掲『新字源』により、いずれも「世間で用いられていることわざ」の意で理解する。

（20）『史記』蘇秦列伝のこの記事に対応する『戦国策』秦策一の記事では「（蘇秦）説秦王書十上而説不行。…乃夜発書、陳箧数十、得太公陰符之謀、伏而誦之、簡練以為揣摩。…期年、揣摩成、曰此真可以説当世之君矣」とあり、蘇秦列伝の「周書陰符」が「太公陰符」となっている。また秦策二では蘇秦が秦恵文王に遊説したのち「太公陰符」から揣摩の術を編み出したように記されているが、蘇秦列伝では蘇秦が「周書陰符」から揣摩の術を編み出したのち秦恵文王に遊説したように記されている。

（21）『史記索隠』の引用は『史記』（中華書局出版、一九五九）による。

（22）『史記会注考証』の引用は『史記会注考証』（大安出版社、一九九八）による。

（23）『論衡』答佞篇に「（張）儀・（蘇）秦、排難之人也、処擾攘之世、行揣摩之術」とあるのも参考になる。

（24）『周書陰符』ないし『太公陰符』は『漢書』藝文志・道家類に「太公二百三十七篇。謀八十一篇。言七十一篇。兵八十五篇」と著録される『太公』の「謀」と関係がありそうであるが、本書は今に伝わっていないため、その詳細は分からない。なお、現行本『鬼谷子』に揣篇・摩篇・符言篇及び本経陰符篇が含まれているが、これらと蘇秦・張儀の「揣摩」の術との関係や、『周書陰符』ないし『太公陰符』との関係は今のところ不詳である。今後の課題としたい。

（25）『韓非子』の引用は陳奇猷『韓非子集釈』（上海人民出版社、一九七四）による。なお、『韓非子』説難篇と注（27）引く五蠹篇は、戦国後期の韓非の自著とされる。

（26）凡説之難、非吾知之有以説之之難也。又非吾辯之能明吾意之難也。又非吾横失而能尽之難也。凡説之難、在知所説之心、可以吾説当之。所説出於為名高者也、而説之以厚利、則見下節而遇卑賤、必棄遠矣。所説出於厚利者也、而説之以名高、則見無心而遠事情、必不収矣。所説陰為厚利而顕為名高者也、説之以名高、則陽収其身而実疏之、説之以厚利、則陰用其言顕棄其身矣。此不可不察也。

（27）ただし韓非自身は、五蠹篇において、合従・連衡の言説に従事する説客を「言談者」と呼び、学者（儒墨）・帯剣者（游侠）・患御者（権力者に仕えて兵役を免れ、財貨で官爵を得る者）・商工の民と併せて、国家を蝕む五蠹の一つに数え、以下のような趣旨を述べている。―群臣で外交政策を説く者は、合従論者と連衡論者に分かれるか、復讐心によって他国の力を借りる者かである。連衡論者は大国に仕えないと、敵に攻められて禍を受けると言うけれども、大国に仕えても実利が伴わない場合には、大国に地図を差し出して領地を削られ、印璽を差し出して君主の名誉が失墜することになる。その一方で合従論者は小国を救って大国を伐たないと天下の信用を失い、国が危うくなり、君主の名誉が失墜すると言うけれども、兵を挙げ大国と敵対して小国を存続させられなければ、合従の仲違いが起こって大国に制圧されることになると―。つまり韓非は、合従策・連衡策の双方を、国家の実利と君主の名誉の両面において本来満足な結果が得られない策謀と見るわけである。法を整備することで、民が農耕によって富を、戦功によって高い身分を得られるようにすることが国家の富強に資すると見る韓非にとって、合従・連衡に従事する説客は、詐欺の言説を用い、外国の力に借りて私利を図り、国家の利益を損なう害虫のような存在でしかなかった。だがしかし、韓非自身も「法術の士」なる説客であったからこそ、説難篇を著して、君主を説得する難しさを強調したのである。

（28）前掲谷口氏論文が、『史記』楚世家・張儀列伝が載せる陳軫が弁論に寓話を用いた例を幾つか取り上げて「以上のような陳軫の弁論に共通するのは、まずその場に一件関係しない話をとりいれて、聞き手を第三者的な立場に導いて冷静にならせ、納得させた上で本来の問題に戻る手法である」と述べるのは、陳軫の弁論における寓話（「説」）の引用が、君主が計略（本題）を聞いて納得するための下地を作る機能をもつとすると捉えられる。

（29）『孫子』の引用は『十一家注孫子校理』（中華書局、一九九九）による。

（30）劉向「戦国策書録」の引用は『戦国策』（上海古籍出版社、一九七八）による。この「書録」に「臣向以為戦国時、游士輔所用之国、為之策謀、宜為戦国策」とある。

（31）近藤光男『戦国策』（講談社学術文庫、二〇〇五、初出は一九八七）の304頁。